

立命館大学大学院 言語教育情報研究科

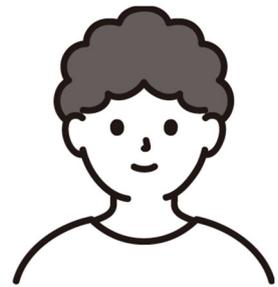
日本語教育学コース 修了生インタビュー

テーマ「日本語教育学演習について教えてください」

言語教育情報研究科の日本語教育学コースは、日本語教育について理論と実践でしっかり深められるようにカリキュラムを展開しており、日本語教師や日本語教育の専門家・研究者をめざしている方が多く在籍しています。日本語教師をめざす人のために、コースに「日本語教員養成課程」を設置し、この所定の要件を充足し研究科を修了した者には課程修了証を授与しています。2024 年度から新しく施行されている登録日本語教員の制度において登録日本語教員の資格を得るためには、この日本語教員養成課程の修了に加えて、必要な試験（応用試験）に合格することが求められます。

日本語教育学コースの実践・演習系科目であり、日本語教員養成課程の必修科目となっている「日本語教育学演習」（協定校での日本語教育実習）は、国内の語学学校・教育機関だけでなく、英語圏・中国語圏・韓国・ベトナムでの実習機会を提供するもので、国内外で活躍できる日本語教師の養成をめざした科目です。今回こちらのインタビューでは、国内の大学（立命館アジア太平洋大学）で日本語授業をおこなった方に実際の実習の様子などを伺いました。国外での実習についても伺ったインタビューもありますので、是非あわせてご覧ください。

お話を伺った方 寺倉 大智さん（2024 年 3 月修了）
所属：日本語教育学プログラム（現：日本語教育学コース）
研究テーマ：中国語の“被”が用いられる受身表現
入試方式：学内進学入学試験
教育実習派遣時期：2023 年 6 月（2 週間）
派遣先：大分県 立命館アジア太平洋大学



Q1_まずはじめに、立命館大学大学院言語教育情報研究科の日本語教育学プログラムに進学した理由を教えてください。

立命館大学で中国語を学び始め、言語に興味を持ったことがきっかけです。特に大学 3 年生の頃、主専攻である法学を差し置いて中国語に傾倒する中で、言語教育に関わる仕事に就きたいと考えるようになりました。自分の経験を顧みて、まず一番に、中国の大学で日本語を教える「外国語教師」を目指すことにしました。そのためには、中国語の基礎的運用力に加え、日本語教育の専門知識や、様々な言語表現のありさまを常に問い質そうとする視点を身につける必要があると考えました。以上の理由を踏まえ、言語教育情報研究科の日本語教育学プログラムへ進学することにしました。

Q2_日本語教育実習の参加について、その参加動機とどのように考えて派遣先の希望を決めたのか教えてください。

前述のとおり、研究科で得た学びを大学で生かしたいと考えていました。また、当時は依然として新型コロナウイルスの影響も強く、海外での教育実習について、とりわけ現地の教室での実施可否などは、不確実な部分が多くありませんでした。そこで、国内で日本語教育に注力し、なおかつ自身の参加動機と一致する立命館アジア太平洋大学（以下「APU」）を派遣先として志望しました。

Q3_日本語教育実習への参加は、まず既に派遣に行かれた先輩の報告を聞く報告会に参加することから始まりますが、先輩の派遣報告や派遣に向けたガイダンスを聞いた時の印象や感想を教えてください。

報告会やガイダンスでは、教育実習中の全般的なスケジュールや留意事項、さらに先生方からは、どのような態度で教育実習に臨むべきなのかという点についてお話いただき、これらを重点的に理解することができました。ただ、個別に詳細な内容を伺うことはできませんでした。例えば、私自身はこれまで教育現場に足を踏み入れた経験がほとんどないに等しく、そのため、実習で求められる教授レベルについてのお話しなども、可能であればもう少し詳しく聞いてみたいと感じました。

Q4_実際に実習に行ってみてどうでしたか。苦労話・よかったこと・発見・気づき・驚き・自身が成長したと思うところなどを教えてください。また、それを受けてご自身の今後の課題だと感じるところはどういったことでしょうか。

APU の教育実習に参加してみて、感じたことや発見はたくさんあります。

まず、良かった点として、たくさんの先生方の授業を見学し、多様な教授スタイルや授業における工夫を体験できたことが挙げられます。APU では日本語の授業がほぼ毎日、しかもかなりの数が開講されています。勿論、教壇実習の担当クラスを中心に見学スケジュールを立てる必要があるため、全ての授業を網羅的に見学する余裕はありませんでしたが、それでもなお、初級から上級まで、各レベルの授業を見学させていただき、時には学生が実施する学習活動にも参加するなどして、日本語の授業に対する理解を深めることができました。この点は、APU の特色ではないかと感じます。

このような環境の中で 2 週間の実習を行ったわけですが、実習初日からほどなくして、クラスによっては、教室内の雰囲気が多量なりとも異なることに気がつきました。私が担当させていただいた初級クラスは、積極的に発言をする学生が非常に多く、授業中も授業前後の時間も含め、全体的に和気藹々としていることが特徴的でした。指導をさせていただいた先生からも、クラスの特徴を生かして、たくさん話す機会を作ってあげることが大切だとアドバイスをいただいたため、授業見学と並行しつつ、学生の積極的な授業参加が促されるような教案の作成に取り組みました。

教案作成の過程では、授業内で取り組む活動や板書計画に、具体的にどのような意図や目的をもたせるかを考えることが、やや難しく感じました。

そして実際の教壇実習では、教案どおりに進行することや、予想以上にクラスが盛り上がることもあれば、うまく活動の工程を一つ飛ばしてしまったり、学生から文法に関して想定していなかった質問が出たりして、うまく対応できない部分もありました。また、実習指導担当の先生からは、ワークシートなどを用いた教室活動を行う際は、各学生の進捗や状況に注意し、活動を終えた学生に対しては適宜、活動内容を応用した新しいタスクを与えたほうがよいといったご指摘をいただきました。

自身の今後の課題としては、日本語文法に関して、突発的な質問に対しても冷静に対応すること、そして、教室の状況を見て、その時々に応じた指示を出せるようになることだと考えます。

Q5_実習で習得・経験したことを、ご自身の今後のキャリアや研究にどう生かしたいと考えていますか。

APU の日本語教育実習に参加させていただき、非常に得難い経験に恵まれたと感じています。2024 年 3 月に修士課程を修了し、現在は言語教育の環境から離れているため、残念ながら教育実習の経験を実務において生かしているとは言えませんが、今後は研究や実践を問わず、言語教育との関連において、学習者がどのような事象を困難に感じ、そしてそれらを乗り越えるための手段はどのように提供されるべきかという課

題に広く取り組んでいければと考えています。